令和7年度佐世保市『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』中学生追跡調査報告書

門田 理世(西南学院大学大学院)　　増田 吹子(西南学院大学大学院生・尚絅大学)
土田 珠紀(西南学院早緑子供の園)　　江田 菜穂子(西南学院大学大学院生・宮崎学園短期大学)
中ノ子 寿子(西南学院大学大学院生・尚絅大学短期大学部)　　佐世保市幼児教育センター

調査結果概要【本文中の参照箇所】

1. 中学生が考える赤ちゃんや保護者とのふれあいの意義

- インタビュー協力者 19 名の内 17 名が、赤ちゃんや保護者とふれあう交流があれば参加したいと答え、その全員がオンラインでの交流よりも対面での交流を希望した。その理由には、赤ちゃんに対する理解が深まることや保護者と話がしすいことがあげられた。【p.4】
- アンケート調査では、回答者の内 94.7%が赤ちゃんとふれあうことが大切だと回答している。その理由として、自分の将来の役に立つことをあげる中学生が最も多く、次いで自分の学びや心持ちへのよい影響があることがあげられた。【p.6】

2. 現代社会の中で生きる中学生の意識

- インタビュー協力者の中で、インターネットで必要な知識を得られるため赤ちゃんや保護者との交流を希望しないと話す中学生やインターネットで流れてくる赤ちゃんの動画を観てかわいいと思うと話す中学生がいた。特に、生成AIの活用が一般的になり、さらに普及が予想される中で、対面でのふれあいに価値を置く傾向がどのように変化していくか注視する必要がある。【p.4】
- インタビュー協力者は、赤ちゃんは社会の中で必要で、且つ愛される存在であると考えている。19 名の内 10 名の語りの中に、「少子高齢化」という言葉があり、中学生は、現在の日本の状況を把握した上で、赤ちゃんは社会にとって必要な存在であると認識していると考えられる。【p.4】

3. 赤ちゃん事業参加経験による対児感情の違い

- 赤ちゃん事業に対面での参加経験がある中学生とオンラインで参加した経験がある中学生、参加経験のない中学生の間で、対児感情に有意な差はみられなかった。これは、赤ちゃん事業以外の経験に違いがあることによるものだと考えられる。【p.5】

調査結果より得られた佐世保市への提言【本文中の参照箇所】

1. 中学生を対象とした『赤ちゃんふれあい事業』の実施

- 多くの中学生が赤ちゃんとふれあうことは大切で、直接ふれあう機会があれば参加したいと考えている。また、中学生は、将来を見据えたり自分の内的な変化を予測したりするなど、実際に目に見えないことがらにも着目して赤ちゃんとふれあうことの意味を考えていた。中学生が『赤ちゃんふれあい事業』に参加し、その効果を検証することで、小学生を対象とした事業とは違う意義や効果が見出せる可能性がある。【p.3, 5-6】

2. 長期的な事業・調査の継続

- 多くの中学生は赤ちゃんとふれあうことは大切だと考えており、赤ちゃんや保護者との交流の機会があるならば対面でのふれあいを希望していることがわかった。一方で、インターネットから情報を得られることを理由に、赤ちゃんとのふれあいを望まない中学生がいることも明らかになっており、社会情勢の変化に伴う中学生の意識の変容を把握しながら、調査から得られた知見を基に、意義ある事業の展開を計画し、それら事業の成果を広く知らせていく必要があると考えられる。【p.4】

Ⅰ. はじめに

佐世保市では平成 27 度より佐世保市幼児教育センターが運営主体となって『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』(以下、事業)を実施しており、西南学院大学大学院門田研究室(研究代表:門田理世)では平成 29 年度から、参加した赤ちゃんの保護者と小学生にとって事業での経験がどのような意義をもつかということについて調査・検証してきた。事業の目的である命の大切さや尊さ、不思議さを感じることや、思いやりの気持ちを育てることなどの心の涵養については、長期的な視点でその育ちを検証する必要がある。そこで、小学5～6年生の時に事業に参加し、赤ちゃんやその保護者とふれあう経験をした子ども達が、中学3年生の時点で赤ちゃんや子育てにどのような意識・印象をもっているのか、小学生時代に赤ちゃんや保護者とふれあった経験をどのように受け止めているのかを検証する追跡調査を令和4年度より行っている。

本報告書では、令和7年度の佐世保市立山澄中学校3年生を対象として行った追跡調査(インタビュー調査・アンケート調査)の分析結果を報告する。

Ⅱ. 調査の概要と分析手法

以下、『中学生追跡調査』の事業の概要と調査・分析対象について記す。

1. 調査対象

①アンケート調査…令和3年度にオンラインで開催された事業に参加した当時の小学5年生(佐世保市立白南風小学校)と令和4年度に対面で開催された事業に参加した当時の小学6年生(佐世保市立木風小学校)を含む、佐世保市立山澄中学校3年生 101 名

②インタビュー調査…アンケート調査の紙面上で、インタビュー調査への協力を承諾した 19 名

2. 調査日時

①アンケート調査…令和7年9月 29 日・30 日

②インタビュー調査…令和7年 11 月 19 日　16:15～17:10

3. 分析手法

アンケート調査の中で選択肢による回答は集計をし、自由記述による回答は意味内容ごとに区切ってコードを付し、抽象度がより高いコード・カテゴリに分類していく質的分析を行った[1)]。なお、1つの回答に複数の意味単位が含まれる場合は、記述に込められた回答者の思いを可能な限り汲み取るため、複数のオープン・コードを生成している。以下、オープン・コードを< >、焦点コードを〔 〕、カテゴリを[ ]、アンケート本文やインタビューでの質問及び選択肢を《 》、原文の回答を「 」、回答の件数やコードの事例数を( )で示す。

Ⅲ. 調査結果及び考察

以下、『中学生追跡調査』の結果及び考察を記す。

1. アンケート回答者の属性

本報告書では、山澄中学校3年生(以下、中学生)在籍 101 名の内、アンケートによる回答を得られた 76 名を対象として分析を行う。

アンケートに回答した 76 名の内、38 名が男性、36 名が女性2名が無回答である(図1)。きょうだいについて尋ねると、一人っ子が5名、きょうだいがいる長子 29 名、末子 27 名、中間子 13 名、無回答2名であった(図2)。出身小学校を尋ねる質問に対しては、オンラインでの事業参加校である白南風小学校出身者が 26 名(34.2%)、対面での事業参加校である木風小学校出身者が 25 名(32.9%)、事業参加経験のないその他小学校の出身者が 23 名(30.3%)、無回答が2名(2.6%)である(図3)。《これまでの人生で赤ちゃんを触ったり、赤ちゃんと関わったりする機会があったか》を尋ねたところ、《ある》が 57 名(75.0%)、《ない》が7名(9.2%)、《覚えていない》が 12 名(15.8%)であった(図4)。《ある》と回答した中学生に《どのような時にどれくらい赤ちゃんとふれあう機会があったのか》を自由記述で尋ねると、家庭で自分の弟や妹、親戚の子ども、あるいは職場体験などの回

答があった。弟妹がいる中学生はほぼ毎日赤ちゃんと関わる機会があったと回答している一方で、職場体験や親戚の子どもとのふれあいは今まで1回もしくは年に数回の機会という回答が多く、弟妹との関わり以外での赤ちゃんとのふれあいはあまりないことがわかった。

2. インタビュー調査の結果及び考察

（1）赤ちゃんや保護者と直接ふれあう意味

インタビュー回答者の中学生に、《もし今赤ちゃん事業のような赤ちゃんや保護者とふれあう場があったら参加したいか》を尋ね、参加したいと回答した中学生には《画面越しのオンラインと直接触れ合う交流（対面）のどちらに参加したいか》について尋ねた。回答者19 名の内、17名が「参加したい」と答え、2名が「参加したくない」と答えた。「参加したい」と答えた 17 名は、全員が対面での参加を希望した。この名は、赤ちゃん事業に対面で参加した経験がある中学生、オンラインで参加した経験がある中学生、参加経験がない中学生で構成される。つまり、事業への参加経験の有無、参加形態に関わらず、赤ちゃんとの直接のふれあいを希望していることが分かる。

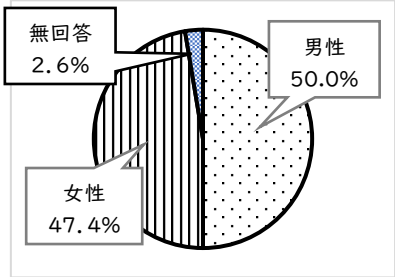

図1. 中学生の男女比

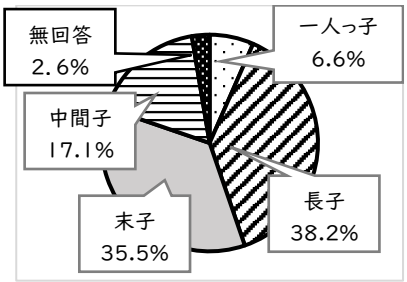

図2.きょうだいの中の出生順位

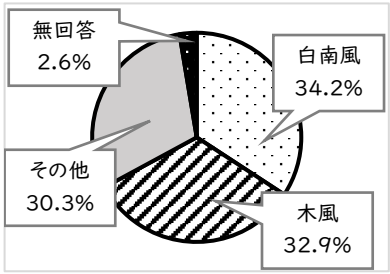

図3. 出身小学校の割合

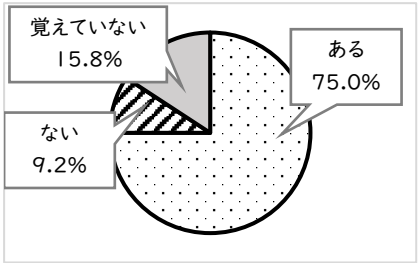

図4. 赤ちゃんとの接触経験の有無

対面で参加したい理由としては「リモートではわからない生命の大切さとか、赤ちゃんの扱い方とか、学べるんじゃないか」「赤ちゃんの特徴とかが見れる」「何をしたら嫌がるかとかが分かる」など、赤ちゃんに対する理解が深まることがあげられた。また、「思ったことをすぐに聞ける」「いろんな話とかも聞ける」などの、保護者と話がしやすいことをあげる回答もみられた。

一方で、「参加したくない」と回答した2名の内、1名はインタビューの中で年下のきょうだいがいて仕事が忙しい保護者に代わって面倒をみることがあることを話している。また、インタビューに先立って行ったアンケートの《赤ちゃんとふれあうことは大切か》という質問に対して「大切」と答えており、その理由を尋ねると「やっぱ赤ちゃんっていうのはすごいかわいくて、学校のこととか、嫌なこととかあっても、赤ちゃん見たら、そういう嫌なことから一回遠ざけれるけん。そこがやっぱり、赤ちゃんに力を感じるところだと思います。」と答えた。日頃から赤ちゃんとふれあうだけでなくお世話をする経験を重ねているため、あえて赤ちゃんに触れる機会を設ける必要性を感じていないと考えられる。

「参加したくない」と答えたもう1名は、参加を希望しない理由について「子どものことが、できるかわからない」「できたとしても、ネットに調べればたぶん出てくるから」と回答している。この中学生は赤ちゃん事業への参加経験はないが、中学 2 年生の時に職場体験で保育園に行き 0～4歳児とふれあった経験や小学生の時に妊婦体験をした経験があると話している。また、アンケートで子育てに対するイメージを尋ねた際に「難しいけど癒される」と回答しており、この回答についてインタビューで理由を尋ねると「まだ言葉が発達していないから、考えることもできて、…（中略）…考えたことを直球に言うことしかできないから、…（中略）…いやいやって言うから、ちょっとそれが精神的にっていうか、…（中略）…めんどくさいっていうか」「笑った時とか、抱きついてきた時とか、甘えてきた時に、ああ癒される」と話している。《赤ちゃんとふれあうことは大切か》という質問に対して「大切」と答えており、その理由を尋ねたところ「ネットには書いていないことがあるかもしれないから、その一応ふれあった方が、そのイレギュラーというか、その時に大丈夫なようにできると思います」と答えた。職場体験などにより赤ちゃんについての知識を得ており、大人の思うようにならない赤ちゃんに対する嫌悪感と赤ちゃんをかわいく大切な存在だと思う気

持ちの両方をもった上で、インターネットでも必要な知識を得られるが直接ふれあうことで得られることがあるということも感じている。

インタビューに回答した中学生の約9割は赤ちゃんや保護者との交流を希望し、その交流はオンラインではなく対面がよいと感じている。また、交流を希望しない中学生も赤ちゃんとふれあうことの大切さは感じている。中学生は、赤ちゃんとのふれあいは赤ちゃんや子育てのことを学ぶ機会になること、それらを学ぶ必要性があることを認識していることが分かる。一方で、インターネットで情報を得られることから直接のふれあいに価値を置いていない中学生もおり、生成AIから情報を得ることが一般化しつつある現在、対面でのふれあいに価値を置く傾向が今後変化していく可能性もある。今までの調査の結果から、赤ちゃんとの複数回のふれあい体験により赤ちゃんに対する感情が肯定的なものへと変化した小学生がいたこと[2)]や、赤ちゃんとふれあう体験をすることで赤ちゃんは未熟で能力が足りない存在だというイメージが薄れるということ[3)]が分かっている。中学生が感じる対面でのふれあいの価値が今後どのように変化していくかについての傾向を注視すると共に、直接ふれあうことの意義を検証し、価値を伝える努力を続けていくことが求められる。

（2）社会における赤ちゃんの存在の意味

インタビューで《赤ちゃんは社会の中でどんな存在だと思うか》を尋ねたところ、「必要な存在」「大切」「癒される」「愛される」といった回答があり、19名中 10 名の回答の中には「少子高齢化」という言葉があった。少子高齢化という言葉がない回答の中にも、「国がうまくいってる指標の一つに、赤ちゃんっていうのはやっぱ入っていく…（中略）…子育てとか、たくさん政治家とか政策を打ち出しているけど、それがうまくいけばいくほど未来は良くなっていくと思います」「赤ちゃんが一人増えるだけでもやっぱり社会に貢献できるかもしれない」「出生率が増えたって聞けばなんか税金とかに関しては将来いいのかなと思って」といったように、社会にとっては子どもの数が増えることがよいことであり、その意味から赤ちゃんの存在に価値を感じている回答が3件あった。それ以外にも「今後の未来を背負っていく」「社会っていう点では必要」という回答があり、赤ちゃんはかわいく癒されるというだけでなく社会の維持発展のために必要で大切な存在だと考えていることが分かる。

一方で、赤ちゃんは社会の中で「少子高齢化とかあるし、できるだけ大切に…（中略）…大切に育ててほしい」存在だと答えた中学生と、「出生率が増えたって聞けばなんか税金とかに関しては将来いいのかなと思って」と答えた中学生の2名が、《子どもが欲しいか》という質問に対しては「別にいらない」「欲しいと思わない」と回答している。その理由として「付き合うとか気持ち悪くて嫌だから…（中略）…一人の方が自由にできる」「お金がかかるって聞くし、大変って聞くし」というように、男女交際に対する嫌悪感・独り身の自由さ・経済的負担や育児の大変さをあげている。男女交際に対する嫌悪感や独り身の自由さをあげた中学生は、前述の子育てのイメージを「難しいけれど癒される」と回答し、言葉が発達していない子どもとの関わりを「めんどくさい」、しかし甘えられると「癒される」と話した生徒である。子どもを欲しいと思わない理由に経済的負担や育児の大変さをあげた中学生は、小学校 1 年生の時に赤ちゃんと関わることがあり、赤ちゃんを「めっちゃ。とにかくかわいくて」と思ったことを話している。また、小学生の時に対面で赤ちゃん事業に参加しており、その際に泣いていた赤ちゃんを抱っこしていたら泣き止んで笑ってくれたことや、保護者から子育ては大変だがそれ以上にかわいいと聞いたということを覚えていた。また、自分の母親から、自分が赤ちゃんの頃に夜泣きが酷く大変だったと聞いていること、インターネットで流れてくる赤ちゃんの動画を観てかわいいと思うということを語った。赤ちゃんをかわいいと思い、社会にとって大切な存在だと考えていても、自分が子どもをもつことには否定的な感情になる中学生もいることが分かる。

多くの中学生は、子育てをしたいかしたくないかということについては自分の思いをもっている一方で、社会全体を俯瞰して考えた時に、少子高齢化が進む現在、赤ちゃんは社会の中で将来を担う大切な存在であるという捉え方をしている。様々な媒体から得られる情報に基づいて社会的な観点から物事を考えられる中学生だからこそ、このような捉え方をできるようになっていると考えられる。しかし、まだ子育てをした実体験がなく、話を聞いたり動画を観たりするなどの間接的な経験に左右される時期でもある。だからこそ、赤ちゃん事業のようなインパクトのある実体験が子ども観や子育て観の形成に大きな影響を与えると推察される。

3. アンケート調査の結果及び考察

(1) 中学生の対児感情

花沢(1992)の対児感情評定尺度法[4]を用いて、中学3年生の対児感情を調査した。対児感情評定尺度法とは、この場合は中学生の赤ちゃんに対する感情について、肯定し受容する「接近感情」と、否定して拒否する「回避感情」それぞれを尺度に沿って採点する方法である。対児感情尺度の採点法は以下の通りである。

① 接近感情を測る“あたたかい”“うれしい”などの 14 項目と、回避感情を測る“よわよわしい”“はずかしい”などの 14 項目の計 28 項目について、”非常にその通り“を3点、”その通り“を2点、”少しその通り“を1点、”そんなことはない“を0点として、接近項目から求めた得点を接近得点、回避項目から求めたものを回避得点として算出する。

② 接近得点と回避得点とが個人の内でどのように拮抗しているかを表す指標として拮抗指数を算出する。

拮抗指数=回避得点／(接近得点+回避得点)×100

この採点法では、接近得点と回避得点が同点になった時に拮抗指数は 50 となり、50 以下の低指数になるほど接近得点の方が高く、50 以上になるほど回避得点の方が高い、つまり拮抗指数が低いほど接近感情が強いことを表す。

アンケート回答者 76 名の内、出身小学校の記入があり赤ちゃん事業参加の有無が確認でき、且つすべての項目に回答があった 61 名の回答について、小学生の時に赤ちゃん事業に対面参加(21 名)、オンライン参加(23 名)、参加経験なし(17 名)の3群に分けて拮抗指数を算出した(表1)。いずれの群も拮抗指数が 50 を下回っており、接近感情の方が強いことが分かる。3つの群を比較すると、対面群よりオンライン群、オンライン群より参加経験がない群の拮抗指数が低く、接近感情が強い傾向があるようにみえるが、一元配置分散分析を行った結果、有意差は認められなかった($p=0.53>0.05$)[5]。

表 1. 対児感情の比較

群	人数	拮抗指数の平均	標準偏差
対面	21	35.6	12.9
オンライン	23	33.6	9.6
参加経験なし	17	31.2	14.0

今回の結果からは、事業への参加経験の有無や、対面・オンラインそれぞれの参加形態が、赤ちゃんに対して好意的な感情を抱くか、あるいは否定的な感情をもつかということにどの程度影響しているのかを明確に示すことはできない。これは、弟妹の有無や赤ちゃん事業以外での赤ちゃんとのふれあいの頻度、保護者から話を聞いた経験などが人によって大きく異なることによると考えられる。しかし、先述のように、小学生のアンケート結果から事業に参加することの意義はあると考えられるので、事業に参加することによる影響がどのように現れるのか、今後さらに明らかにしていきたい。また、前述の通りインタビューに協力した中学生の多くが赤ちゃんや保護者との直接のふれあいに意義を感じ、対面での交流を希望していることからも、赤ちゃん事業は今後も継続・拡大していく意味はあるといえる。

(2) 中学生が赤ちゃんとふれあうことを大切だと思う理由

中学生 76 名に対して行ったアンケート調査において、《赤ちゃんとふれあうことが大切か》という問いへの回答は、《大切》が 43 名(60.6%)、《どちらかといえば大切》が 28 名(36.8%)、合計 71 名(94.7%)であった。つまり中学生は、小学生の時に本事業に参加したか否かに関わらず、ほぼ一様に赤ちゃんとふれあうことに対して、その重要性を見出しているといえる。

次に自由記述されたその理由を分析した結果 18 のオープン・コード、9の焦点コード、4のカテゴリに集約された(表2)。中学生が考える赤ちゃんとふれあうことの意義について、自分が子育てをする時を想定するなど、[自分の現在や将来への貢献]をあげている回答が最多であった。また、赤ちゃんとふれあうことが[命や人を大切に思う機会]であることや、[学びや心持ちへのよい影響]があることなど、ふれあうことによる自分の内面の変化に目を向けていることがわかった。

表2.「赤ちゃんとふれあうことを大切と思う理由は何ですか」

カテゴリ	焦点コード	オープン・コード
自分の現在や将来への貢献(31)	将来に役立つ(13)	将来に役立つから(11)
		将来、赤ちゃんとふれあう時のため(2)
	将来、子どもを育てる時に役立つ(10)	自分が親になるかもしれないから(5)
		自分の子どもを育てるために慣れておきたいから(3)
		自分の子どもを育てるためによい経験となるから(2)
	今すぐに役立つ赤ちゃんとの関わり方を学ぶ(7)	赤ちゃんと関わる時の知識や技術を身につけるため(4)
		身近にいる赤ちゃんとの関わりに活かすため(3)
	将来の仕事に役に立つ(1)	将来の仕事のため(1)
学びや心持ちへのよい影響(20)	自分の心がよい状態になる(14)	赤ちゃんとふれあうことで癒され、心が落ち着くから(9)
		赤ちゃんがかわいいから(4)
		赤ちゃんに対する印象が好転したから(1)
	学んだり感じたりできることがたくさんある(6)	新たなことを知ったり感じたりできるから(4)
		赤ちゃんを育てる大変さを知ることができるから(2)
命や人を大切に思う機会(13)	命を大切に感じることができる(9)	命について考えることができるから(5)
		赤ちゃんの小さな命を大切に感じることができるから(4)
	人を大切に思う気持ちになれる(4)	優しい気持ちで人と関わることができるようになる(3)
		赤ちゃんがかわいい存在だから(1)
赤ちゃんとふれあう稀少な機会(3)	赤ちゃんとふれあう稀少な機会である(3)	赤ちゃんとふれあうことがあまりないから(3)

以上のことから中学生は、将来を見据えたり自分の内的な変化を予測したりするなど、実際に目に見えないことがらにも着目して赤ちゃんとふれあうことの意義を感じている。本事業のような赤ちゃんとのふれあいの経験に意義を見出している中学生は、そのような場を潜在的に希望している可能性があるのではないだろうか。

Ⅳ. まとめ

令和7年度佐世保市赤ちゃんふれあい事業中学生追跡調査の結果から、多くの中学生は赤ちゃんとふれあうことを大切で意義のあることだと考えていることがわかった。その理由としては、自分が子育てをする時に役立てることができる、赤ちゃんに癒されるといったことがあげられている。これらは、今までの調査結果と同様の傾向を示しており、継続的な調査によって中学生の赤ちゃんとのふれあいに対する意識が明らかになってきたといえる。

インタビュー調査からは、中学生はインターネットの普及や少子高齢化といった現在の日本の社会情勢を背景に、赤ちゃんの存在を捉えていることも示唆された。インターネットから必要な知識を得られるため赤ちゃんとの直接の交流を希望しないと話した中学生も、赤ちゃんとのふれあいは大切なものだという認識はあり、自分が希望するかどうかということとは別にふれあいの意義は感じていることがわかった。令和3年度にオンラインで開催された事業に参加した小学生のアンケート調査では、《赤ちゃんの様子を見ることができてよかったと思うか》という質問に対して 84.8%が《よかった》《まあまあよかった》と答えており、その理由として最も多かったのは〔自分の学びについて〕であり、全体の 70.2%を占めた。具体的には<赤ちゃんのことが知れた・わかった><将来に活かせる>などのオープン・コードがあげられている。<赤ちゃんがかわいかった>というオープン・コードもあるが、赤ちゃんや子育てについての知識を得られたことをよかったと考えた小学生が多い[6)]。一方で、令和4年度に対面で開催された事業に参加した小学生を対象としたアンケート調査では、《今日赤ちゃんやお母さんに会ってみて感じたこと、考えたこと》という質問の回答は［赤ちゃんをかわいいと思う感情］［赤ちゃんに対する気付きや学び］の2つのカテゴリに分類され、事業を通して赤ちゃんをかわいいと思う気持ちをもった小学生と学びを得られたと考えた小

学生はほぼ同数であった。また、<赤ちゃんの小ささをかわいいと思った><赤ちゃんの柔らかさを感じた><赤ちゃんの手足の柔らかさを感じた>というオープン・コードがあり、赤ちゃんと直接ふれあうことで、赤ちゃんの姿や感触の実感を得ていることがわかった[7)]。赤ちゃんをかわいいと思う回答は、令和3年度のオンラインでの事業の時よりも令和4年度の対面の事業の時の方が多い。インターネット上で情報を得ること、オンラインでの交流、対面でのふれあいのそれぞれに意味や価値はあるが、対面でのふれあいで得られる赤ちゃんの小ささや柔らかさという実感は、知識を得ることに加えて赤ちゃんを愛おしい存在として感じる心の動きを経験することにつながると考えられ、これは対面でのふれあいの大きな価値であるといえる。

前述のインタビュー協力者のように、社会にとって必要なことと自分が希望することを別のこととして捉えているならば、赤ちゃんの存在が社会の中では必要だということを知識として知っていても、自分が子どもを産み育てることや赤ちゃんと関わることには直接つながらないこともある。しかし、知識ではなく思いとして赤ちゃんの存在を大切に感じる機会があることは、社会の中で赤ちゃんや子育て中の保護者に温かいまなざしを向けられることにつながり、赤ちゃんや保護者が過ごしやすい社会の形成に役立つと思われる。また、赤ちゃんを大切に思う気持ちがあることは、様々なことを経験しながら成長していく中学生の今後の子ども観や子育て観に影響するであろう。一方で、中学生の多くが少子高齢化社会の中で未来を担う存在であるという意味で赤ちゃんを大切な存在として認識している可能性も示唆された。本来は、赤ちゃんの存在は社会のためにあるのではなく、赤ちゃんも一人の人間であり、その存在自体を尊重されるべきである。中学生が赤ちゃんの存在を“一人の人間として尊重される存在”“社会の維持発展に必要な存在”など、どのように捉えているのかということについては、今回の調査からは明らかになっていない。もし、中学生が赤ちゃんを社会の維持発展のための存在、少子高齢化の問題を解決するための存在として捉えているのだとすれば、その要因について今後検討する必要がある。

今年度の調査対象には、小学生の時に対面で事業に参加した経験のある中学生とオンラインで参加した経験のある中学生、参加経験のない中学生が同程度の割合で含まれていた。この3群を比較した結果、事業への参加経験や参加形態の違いによる対児感情に有意差はみられなかった。これは、どのような対児感情をもつかということの要因には、事業への参加経験以外の要素が多く含まれることによると考えられる。オンラインでの事業の開催は、令和3年度のみであったため、今後事業の参加形態の違いによる比較はできず、中学生のもつ対児感情とその差の要因を追究することは難しい。しかし、インタビュー調査の結果から、中学生が赤ちゃんとのふれあいについてどのように考えるかということにインターネットの普及が影響している可能性が示唆されており、社会情勢の変化に伴って、中学生の赤ちゃんへの対児感情や赤ちゃんとのふれあいに対する意識が変容することはあり得る。社会情勢がどのように変化しても、中学生が間接体験だけでなく直接体験から得た知見や感覚が赤ちゃんや子育てに対するイメージによい影響を与えることは十分に考えられるため、赤ちゃん事業のような取り組みを学校種を越えて拡大することは、中学生の育ちを支え、命を大切にする社会の創造に寄与するものと考えられる。

脚注

1）佐藤郁哉（2008）「質的データ分析法―原理・方法・実践」 新曜社

2）門田理世他「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業に関する調査研究」令和 6（2024）年度 佐世保市との包括的連携協定事業報告書、p.6

3）門田理世他「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業に関する調査研究」令和5（2023）年度 佐世保市との包括的連携協定事業報告書、p.29

4）花沢成一（1992）「母性心理学」医学書院、p.71

5）分散分析とは3つ以上のデータがある場合、それぞれの平均値の間に有意な差があるかどうかを判定する手法である。今回は拮抗指数の平均という一つの因子を分析するため、一元配置分散分析を用いる。分散分析では、p 値（有意確率）が 0.05 以下の場合に有意差があるとみなせる。

6）門田理世他「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業に関する調査研究」令和 3（2021）年度 佐世保市との包括的連携協定事業報告書、p.25

7）門田理世他「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業に関する調査研究」令和 4（2022）年度 佐世保市との包括的連携協定事業報告書、p.26
8)花沢成一（1992） 前掲書、p.241

（資料）令和7年『赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業』中学生追跡調査 アンケート項目

中学生追跡調査アンケート項目	
問1	「赤ちゃん」と聞いて何を思い浮かべますか？（自由記述回答）
問2	赤ちゃんとふれあう機会があったとしたらあなたはその赤ちゃんとふれあってみたいですか？（選択肢） そう考える理由もあわせて教えてください（自由記述回答）
問3	あなたはこれまでの人生で、赤ちゃんを触ったり、赤ちゃんと関わったりする機会がありましたか？（選択肢） あると答えた人は、いつ、誰と、どれくらい、関わりましたか？
問4	赤ちゃんとふれあうことはあなたにとって大切なことですか？（選択肢） そう考える理由も教えてください（自由記述回答）
問5	あなたの性別・きょうだい構成・出身小学校を教えてください
問6	あなたは「子育て」にどのようなイメージを持っていますか？（自由記述回答）
問7	あなたは小学校時代に「赤ちゃんふれあい事業」に参加した経験がありますか？（選択肢） あると答えた人は、今でも印象に残っていることを教えてください（自由記述回答） 赤ちゃん事業をきっかけに、赤ちゃんに対するイメージは何か変わりましたか？（選択肢） 変わったという人は、何が変わったか教えてください（自由記述回答）
評定	現在あなたは赤ちゃんにどのようなイメージを持っておられますか？下記の評点表の各項目で、あなたの気持ちに合うものを一つ選んでください（花沢[8]の評定表から引用）

	非常にそのとおり	そのとおり	少しそのとおり	そんなことはない		非常にそのとおり	そのとおり	少しそのとおり	そんなことはない
あたたかい					あかるい				
よわよわしい					なれなれしい				
うれしい					あまい				
はずかしい					めんどうくさい				
すがすがしい					たのしい				
くるしい					こわい				
いじらしい					みずみずしい				
やかましい					わずらわしい				
しろい					やさしい				
あつかましい					うっとうしい				
ほほえましい					うつくしい				
むずかしい					じれったい				
ういういしい					すばらしい				
てれくさい					うらめしい				